2023 年５月 25 日

「2022 年度大会アンケート」回答のまとめ

将来計画特別委員会

日本中国学会第 74 回大会は、2022 年 10 月８日・９日、早稲田大学を会場として、対面およびオンラインによるハイフレックス方式で開催された。それを受けて、同年 10 月半ばから翌年２月末日まで、本学会ホームページにおいて、「2022 年度大会アンケート」を行ったところ、198 名から貴重な回答を得た。回答に協力くださった会員各位に心より深謝申し上げる。

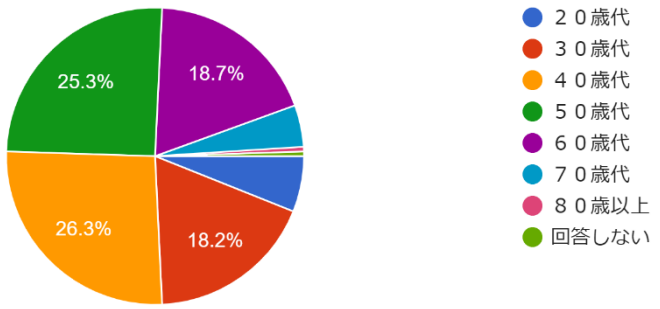
すでに「日本中国学会便り」本年度第１号（2023 年 4 月 30 日発行）の委員会報告において、概括的な結果を報告したので、ここでは内容を**【Ａ】回答者すべてからの回答（１）**、**【Ｂ】対面参加者からの回答**、**【Ｃ】オンライン参加者から回答**、**【Ｄ】回答者すべてからの回答（２）**に改めて整理した上で、その詳細な回答結果をまとめて提示する。

なお、各グラフの基線は、いずれも時計の 3 時に位置する。

【Ａ】回答者すべてからの回答（１）

■回答者の年齢

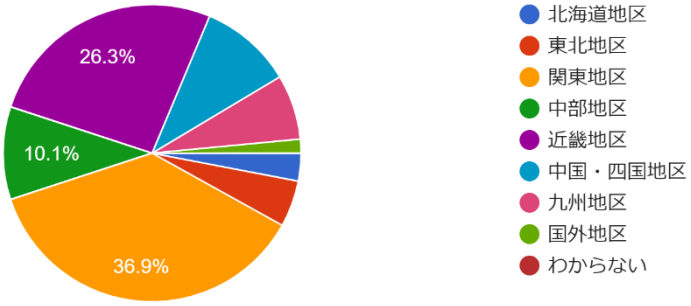
貴方の年齢をお選びください。



198 件の回答のうち、「20 歳代」12 名、「30 歳代」36 名、「40 歳代」52 名、「50 歳代」50 名、「60 歳代」37 名、「70 歳代」９名、「80 歳以上」１名、「回答しない」１名であった。

■回答者の所属地区

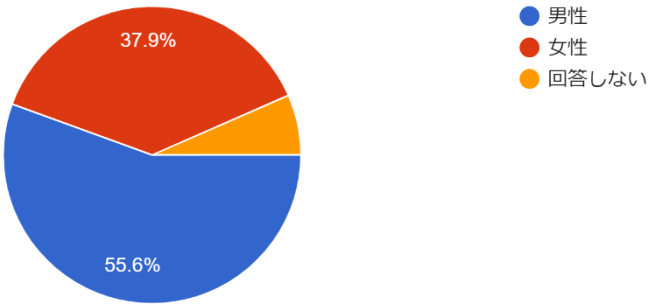
貴方の所属地区をお選びください。



198 件の回答のうち、「北海道地区」 6 名、「東北地区」10 名、「関東地区」73 名、「中部地区」20 名、「近畿地区」52 名、「中国・四国地区」20 名、「九州地区」14 名、「国外地区」 3 名であった。

■回答者の性別

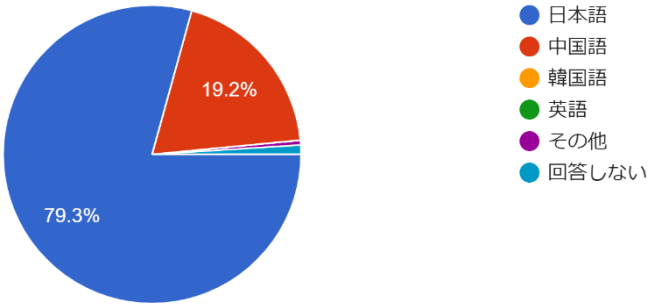
貴方の性別をお選びください。



198 件の回答のうち、「男性」110 名、「女性」75 名、「回答しない」13 名であった。

■回答者の母語

貴方の母語をお選びください。

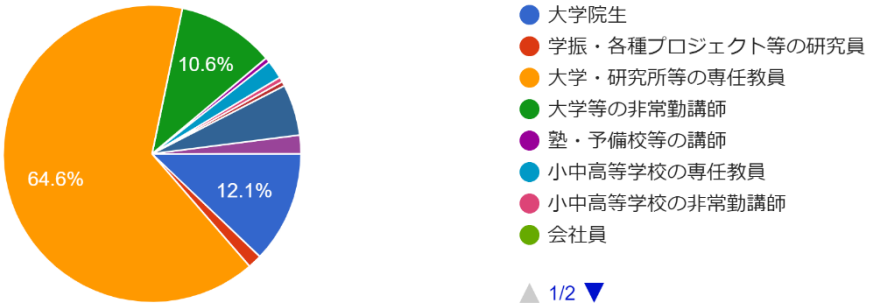


198 件の回答のうち、「日本語」157 名、「中国語」38 名、「その他」1 名、「回答しない」 2 名で

あった。

■回答者の職業

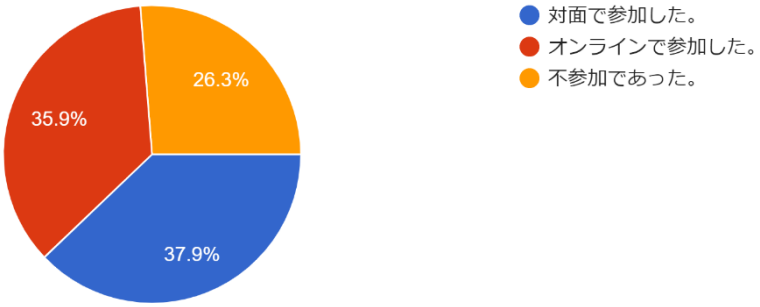
貴方のご職業をお選びください。



198 件の回答のうち、多い順に「大学・研究所等の専任教員」128 名（64.6%）、「大学院生」24 名（12.1%）、「大学等の非常勤講師」21 名（10.6%）、「小中高等学校の専任教員」４名（2.0%）、「学振・各種プロジェクト等の研究員」３名（1.5%）、「塾・予備校等の講師」１名（0.5%）、「小中高等学校の非常勤講師」１名（0.5%）、「公務員・団体職員等」１名（0.5%）、「その他」11 名（5.6%）、「回答しない」４名（2.0%）であった。

■大会への参加・不参加について

10 月８日・９日のハイフレックス開催大会に参加されましたか。



198 名の回答のうち、「対面で参加」75 名（37.9%）、「オンラインで参加」71 名（35.9%）、「不参加」52 名（26.3%）であった。

■不参加の理由について

不参加であった理由をお選びください。

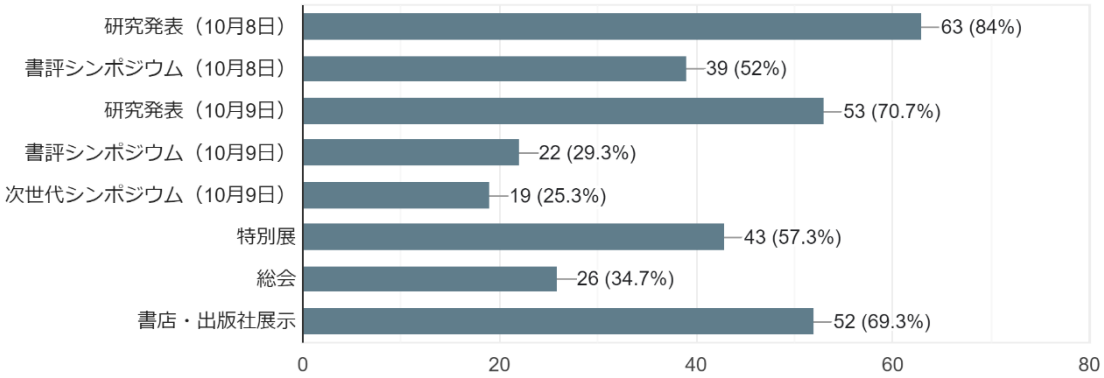
52 件の回答のうち、多い順に「当初から不参加の予定であった」24 名（46.2%）、「参加するつもりであったが、事前申し込みを失念してしまった」18 名（34.6%）、「オンラインでの参加を試みたがアクセスできなかった」２名（3.8%）と続いた。

また「その他」として、「多忙のため」「校務（推薦入試）のため」「時間が取れれば参加しようと思っていたが、時間が取れなかった」「当初は不参加の予定であったが、直前に予定がかわり参加しようとしたが、間に合わなかった」「申込期間が１週間しかなく、確認が遅れ、申込できなかった」「振り込みできなかった（メールは締切後に気づいた）」「メールで通知された払込票の番号が間違っており、振込完了できず、その後、多忙となったため」「海外から参加費を振り込めなかったため」という回答が各１件あった。

【Ｂ】対面参加者からの回答

■参加プログラムについて

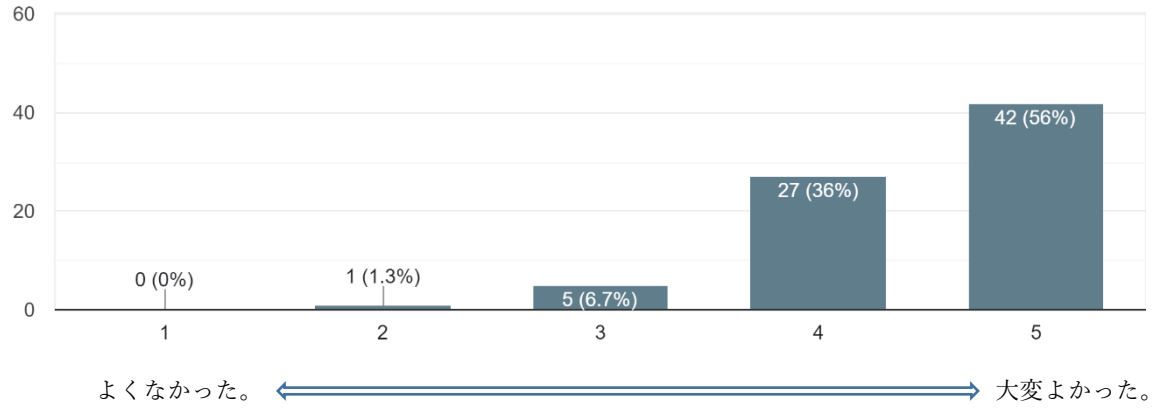
参加された方、そのプログラムをお選びください。複数回答可。



75 件の回答のうち、「研究発表（10 月８日）」63 名（84.0%）、「研究発表（10 月９日）」53 名（70.7%）、「書評シンポジウム（10 月８日）」39 名（52.0%）、「書評シンポジウム（10 月９日）」22 名（29.3%）、「次世代シンポジウム」19 名（25.3%）、「特別展」43 名（57.3%）、「総会」26 名（34.7%）、「書店・出版社展示」52 名（69.3%）であった。

■対面による大会の実施方法について

対面による大会の実施方法は、いかがでしたか。次の中からお選びください。



75 件の回答のうち、多い順に［５］（大変よかった）42 名（56.0%）、［４］（よかった）27 名（36.0%）、［３］（どちらともいえない）５名（6.7%）と続いた。［４］［５］をあわせると、69 名（92.0%）になり、９割以上から肯定的な回答があった。

▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

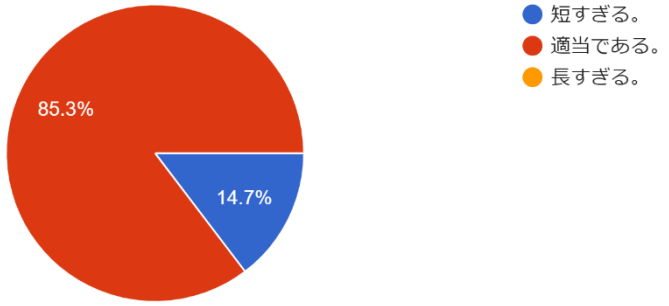
対面による大会の実施方法について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

よかった点として「最も理想的な形態で実施いただいた」「会場の雰囲気を共有できたのは大きい」「人に会えることの大切さを痛感した」「発表者や質問者等の熱意が伝わった」「対面参加ならではの現地での交流場所が用意されていた」「歴史部会が今回設けられたのはよかった」「各会場の場所が分かりやすく掲示されていた」などが挙げられた。

また、改善の余地がある点として「対面の場にいた人同士の交流はよかったが、オンライン参加の人とは没交渉に終わった感が否めない」「シンポジウムについて、会場が使える時間内であれば規定時間よりも延長してよいことを予め知らせておいてほしかった」「書評シンポジウムなどは、今後対面での参加者とオンラインでの参加者の間に、何かうまく交流ができる形を作れないかと期待する」「会場には簡易的な卓しかなく、書込みをするのに不便であった」「懇親会がなかったのは仕方ないが、だからこそ参加者名簿は欲しかった」「充実した設備がない大学にも開催を引き受けてもらえるような工夫を今後は考えていく必要がある」などの意見があった。

■研究発表・質疑応答の時間について

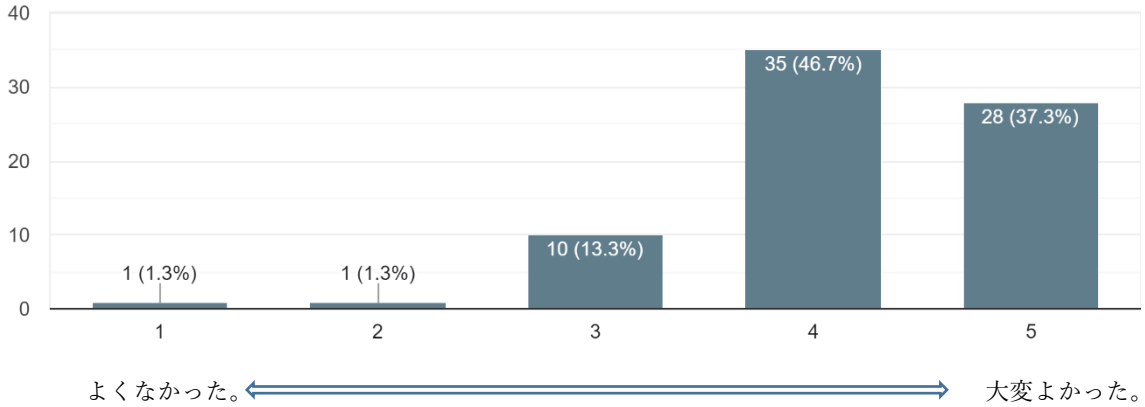
研究発表・質疑応答の時間（25 分間）についてはいかがでしたか。



75 件の回答のうち、「適当である」64 名（85.3%）、「短すぎる」11 名（14.7%）であった。研究発表・質疑応答の時間は、おおむね適当であったといえる。

■司会のコメント、質疑応答の方法について

司会のコメント、及び質疑応答の方法についてはいかがでしたか。



75 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）35 名（46.7%）、［５］（大変よかった）28 名（37.3%）、［３］（どちらともいえない）10 名（13.3%）と続いた。［４］［５］をあわせると、63 名（84.0%）になり、多数から肯定的な回答を得た。

▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

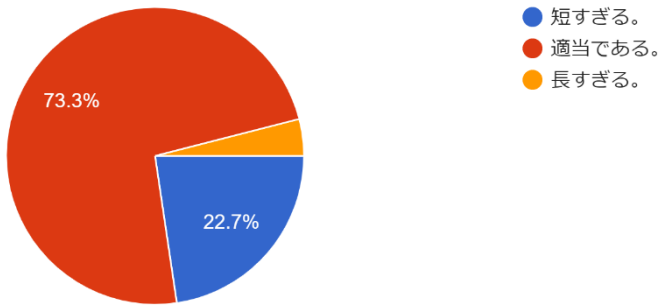
司会のコメント、及び質疑応答の方法について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

「質疑応答の時間をもう５分程度長くしたほうがよい」「質疑応答が少ないので、もっと質問を促す方法を考えられないか」「オンラインで参加している会員も多いため、フロアからの質問が少なくて寂しかった」「司会が YouTube でのコメントを、会場からの質問と合わせて拾うのは、その仕事として、時間的にかなり難しい」「オンライン参加者からの質問があまり拾われていなかったので、タイムキーパーにオンライン参加者の挙手やチャットの状況をチェックしてもらうのを徹底すればよりよかった」「オンラインでのコメントによる質問が仮に司会者

に採用されずとも、発表者や対面の場での参加者に見えれば、何か議論の呼び水になるかもしれない」「YouTube でのコメント自体は有用と思うので、会場からとは別に回答時間を設けるとよいかもしれない」など、質疑応答に関する意見や提案が多く寄せられた。

■発表と発表の間の休憩時間について

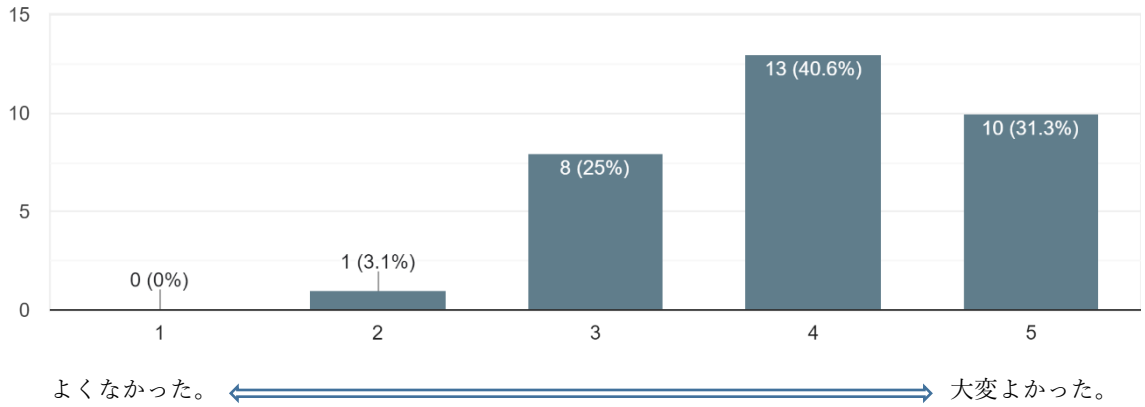
発表と発表の間の休憩時間（５分間）についてはいかがでしたか。



75 件の回答のうち、「適当である」55 名（73.3%）、「短すぎる」17 名（22.7%）、「長すぎる」３名（4.0%）であった。発表と発表の間の休憩時間（５分間）については、おおむね適当であったといえる。

■総会について

総会に参加された方におたずねします。総会の内容についてはいかがでしたか。



32 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）13 名（40.6%）、［５］（大変よかった）10 名（31.3%）、［３］（どちらともいえない）８名（25.0%）と続いた。［４］［５］をあわせると、23 名（71.9%）になり、７割以上から肯定的な回答があった。

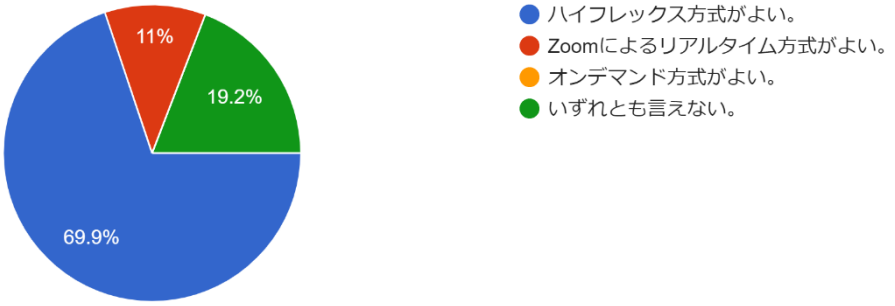
▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

総会について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

「参加者が少ないのが残念である」「総会の時間を短くした方がよかったかもしれない」などの意見が寄せられた。

■開催方式について

本年度はハイフレックス方式により開催されました。オンライン開催の場合、昨年度のようなZoomによるリアルタイム方式、一昨年度のようなオンデマンド方式と比べて、いずれがよいと思われますか。



73件の回答のうち、「ハイフレックス方式がよい」51名（69.9%）、「いずれとも言えない」14名（19.2%）、「Zoomによるリアルタイム方式がよい」８名（11.0%）、「オンデマンド方式がよい」は皆無であった。ちなみに、一昨年度は「オンデマンド方式」希望が多く、昨年度は「リアルタイム方式」希望が多かったが、今回は、「ハイフレックス方式」希望者が多数を占め、約７割に及んだ。ただし「いずれとも言えない」という回答も約２割からあった。

▼理由（自由記述）

その理由を自由にご記入ください。

ハイフレックス方式を希望する理由として「選択肢が多様である」「遠方にいる身としては参加しやすい」「発表者と司会者の拘束時間と負担が減る」「対面方式にはオンラインにはない現場感(画面と音声言葉以外の大量の情報の共有)のよさがあり、オンライン参加にはたとえ会場に行けなくても世界のどこからでも学会に参加できる良さがある」「大会はやはり対面が望ましいと実感した一方、会員数減少が問題視されるなかで、校務や家庭の事情等で大会当日に現地に赴けない会員がオンラインで参加出来る機会を確保することは極めて重要である。今回のようにスイッチャーを使っての本格的な映像の切り替えまでは出来なくても、教室内に設置した定点カメラによる映像を流すだけでも十分なので、配信は今後も絶やさず継続してほしい」「オンデマンドでは質疑応答が本格的になりすぎて発表者・司会の負担が大きくなりすぎ、Zoomでは質問が出にくいが、今回の限定配信のYouTubeでのコメントは、一番バランスが取れていると思った」などがあった。その上で「ハイフレックスの場合、ネット配信は主催者側の負担を減らすために、当日の配信設備はノートパソコン一台と、感度の良い会議用マイクとで

済ませ、会場の音声を配信するだけでもよいのではないか」という提案もあった。

また、Zoomによるリアルタイム方式を希望する理由として「リアルタイム方式の方が一体感を持てる」「多くの会員は Zoom の操作にも慣れており、簡便でコストがかからない」「ハイフレックス方式は、オンライン参加者と対面参加者の間での温度差（交流のできないこと）が大きい気がする」「参加方式を統一した方が、少なくとも平等な土俵の上で皆が議論に参加する形に持っていきやすい」などがあった。

一方、いずれとも言えない理由として「会場にいるとオンライン参加者が全く見えず、質問等も出されなかったように見受けられたので、ハイフレックス方式があまり実感出来なかった」「理想をいえば、ハイフレックス方式が望ましいが、それを開催校に強いるのは避けるべきである」「開催校の事情を考慮したうえでオンラインの方式については選択すべきである」「条件が可能であればハイフレックス、難しければZoomによるリアルタイム方式が望ましい」などがあった。

■大会全般について

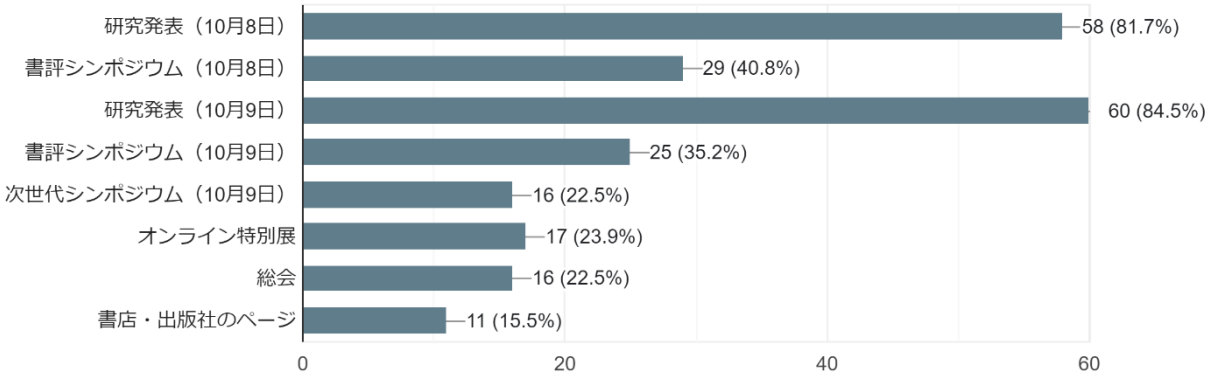
その他、第 74 回大会に関して、お気づきの点やご意見などがありましたら、自由にご記入ください。

「体調の関係で、一日目は対面、二日目はオンラインで参加した。こうした参加方法が選べる点も、ハイフレックス方式ならではと思い、ありがたかった」「大変意欲的で、盛りだくさんなプログラムであった。図書館の展示を昼休みに見に行きたかったが、行く途中で次の発表の時間が迫り、結局断念した」「大会の準備・当日の運営ありがとうございました。ただすべての締め切りに余裕がなく、その事前連絡が遅いという点が不便だったので、今後改善してほしい」「書評シンポジウムは良かったが、次の枠が空いている場合に延長を前提で行っていた。それならば、最初からその時間でタイムテーブルを組んだ方がいいと思う」「部会の会場ごとの移動がかなり大変だった。各会場の間が近ければ、聴衆も動いて交流が生まれやすくなったように思う」などの記述があった。

【C】オンライン参加者から回答

■参加プログラムについて

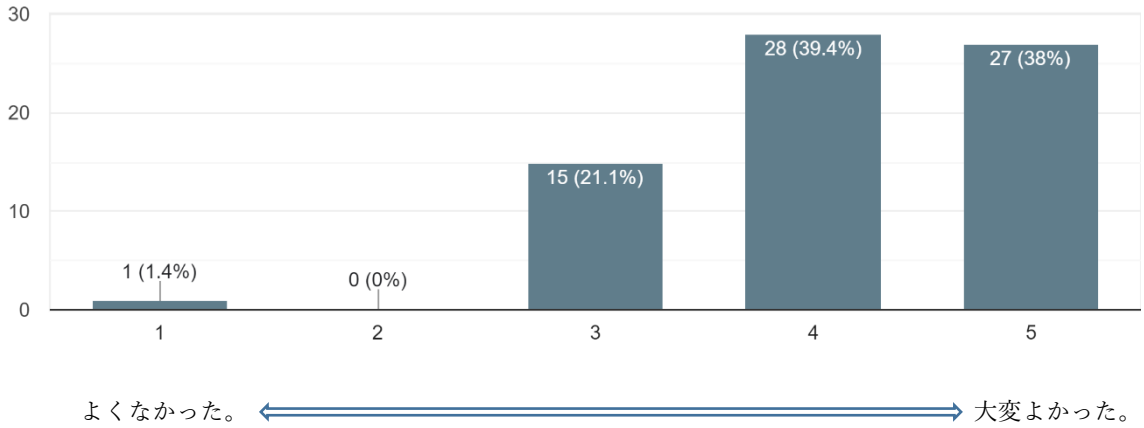
参加された方、そのプログラムをお選びください。複数回答可。



71 件の回答のうち、「研究発表（10 月 9 日）」60 名（84.5%）、「研究発表（10 月 8 日）」58 名（81.7%）、「書評シンポジウム（10 月 8 日）」29 名（40.8%）、「書評シンポジウム（10 月 9 日）」25 名（35.2%）、「次世代シンポジウム」16 名（22.5%）、「オンライン特別展」17 名（23.9%）、「総会」16 名（22.5%）、「書店・出版社のページ」11 名（15.5%）であった。

■オンラインによる大会の実施方法について

本年度のオンライン大会の実施方法は、いかがでしたか。次の中からお選びください。



71 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）28 名（39.4%）、［５］（大変よかった）27 名（38.0%）、［３］（どちらともいえない）15 名（21.1%）と続いた。

▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

本年度のオンライン大会の実施方法について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください。

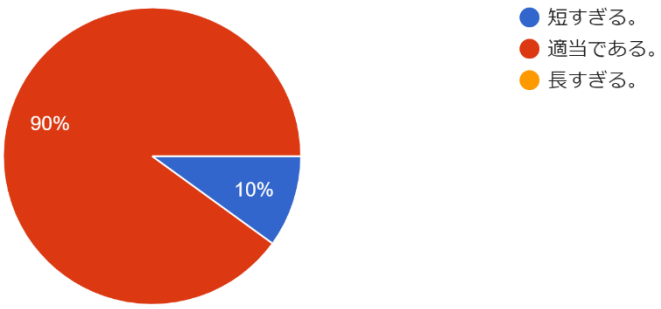
よかった点として「発表資料をダウンロードし、会場にいるのと同様に資料を見ながら発表を聞くことができた」「YouTube からの放送だったので、興味がある発表を繰り返して聞くことができた」「オンライン上で気軽に入退室でき、音声や画像も安定していた」「対面とのハイフレックスだったので、臨場感があった。出張費の出ない大学外の所属の者にとって、この形式

は非常にありがたい。YouTube コメントで質問ができるシステムもよいと感じた」などがあった。

一方、改善の余地がある点として「会場の空気があまり伝わらなかった」「質問がチャットに限られ、不便を感じた」「質疑応答時にオンライン上の質問にも答える時間が確保されているとよかった」「YouTube ライブの方式は Zoom と比べて参加した実感が湧きにくい」「今回の YouTube 配信ではオンライン参加者数は表示されるものの、参加者氏名が不明のため、昨年の Zoom に比べて参加しているという臨場感があまり感じられなかった」「同時刻の別会場における発表やシンポジウムも聞けるように、アーカイブもあるとなおありがたい」などがあった。

■研究発表・質疑応答の時間について

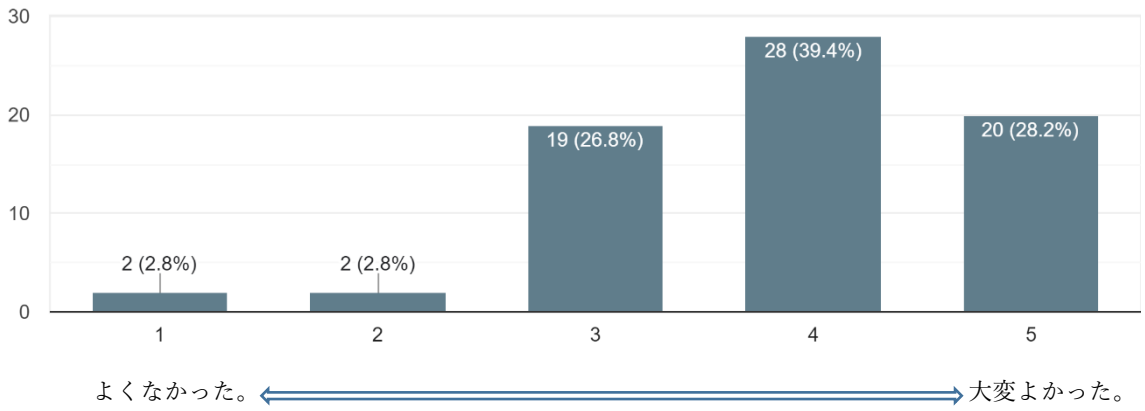
研究発表・質疑応答の時間（25 分間）についてはいかがでしたか。



70 件の回答のうち、「適当である」63 名（90%）、「短すぎる」7 名（10%）であり、「適当である」という回答が大多数であった。

■司会のコメント、質疑応答の方法について

司会のコメント、及び質疑応答の方法についてはいかがでしたか。



71 件の回答のうち、多い順に［4］（よかった）28 名（39.4%）、［5］（大変よかった）20 名（28.2%）、［3］（どちらともいえない）19 名（26.8%）と続いた。［4］［5］をあわせると、48 名（67.6%）で、肯定的な回答が大半であった。

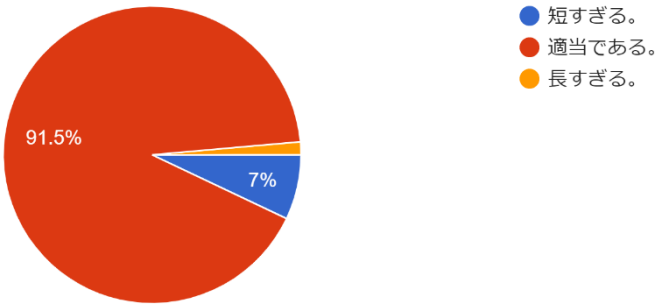
▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

司会のコメント、及び質疑応答の方法について、よかった点、改善の余地がある点など自由にご記入ください

改善の余地がある点として「YouTube 上のコメントを拾うのが難しそうに見えた。コメントを拾うサポート役がいてもよいと思う」「書評シンポジウムでは、コメンテーターと著者が司会者に指名されなくても自由に発言するような時間があるといいと思う」などの記述があった。

■発表と発表の間の休憩時間について

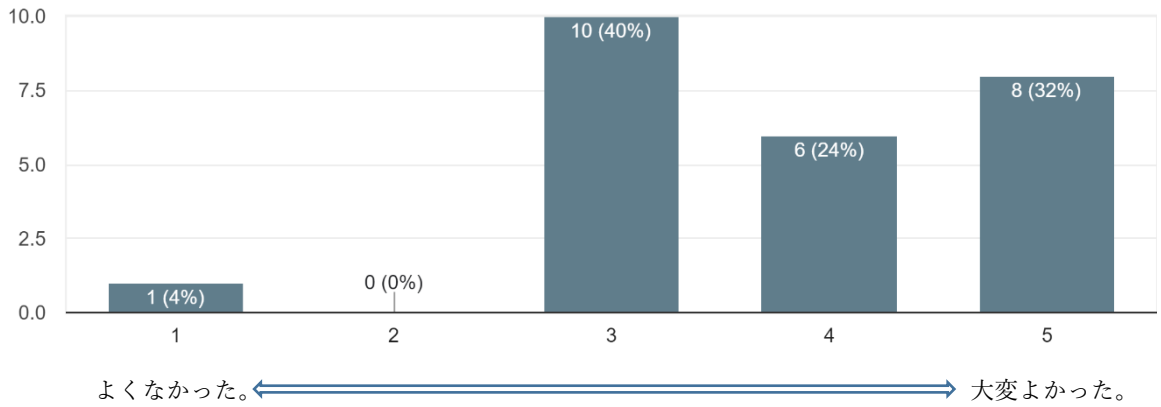
発表と発表の間の休憩時間（５分間）についてはいかがでしたか。



71 件の回答のうち、「適当である」65 名（91.5%）、「短すぎる」5 名（7%）であり、「適当である」という回答が多数を占めた。

■総会について

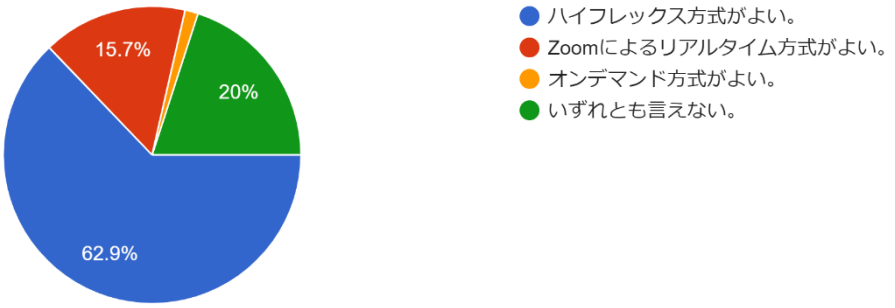
総会に参加された方におたずねします。総会の内容についてはいかがでしたか。



21 件の回答のうち、多い順に［３］（どちらともいえない）10 名（40.0%）、［５］（大変よかった）８名（32.0%）、［４］（よかった）６名（24.0%）と続いた。

■開催方式について

本年度はハイフレックス方式により開催されました。オンライン開催の場合、昨年度のようなZoomによるリアルタイム方式、一昨年度のようなオンデマンド方式と比べて、いずれがよいと思われますか。



70件の回答のうち、「ハイフレックス方式がよい」44名（62.9%）、「いずれとも言えない」14名（20.0%）、「Zoomによるリアルタイム方式がよい」11名（15.7%）、「オンデマンド方式がよい」1名（1.4%）となった。なお、対面参加者からの回答とオンライン参加者からの回答を比較すると、「ハイフレックス方式」と「オンライン方式」の希望順に変化はないが、オンライン参加者からの回答は、「ハイフレックス方式」希望の割合が約7ポイント低く、反対に「Zoom によるリアルタイム方式」希望の割合が約6ポイント高いという傾向が見られる。

▼理由（自由記述）

その理由を自由にご記入ください。

ハイフレックス方式を希望する理由として「対面がベストであるが、オンライン開催もやむを得ない。その中でハイフレックスが対面に一番近い」「対面を基本とし、オンラインを副手段とするスタンスが良いと思う。オンラインのみでは学会で直接他の研究者と交流したり面識を持ったりする機会が失われる。一方で校務や育児等により遠方会場に出向くことが難しい場合、また経済的に難しい学生にとってオンライン開催は非常にありがたい」「会場に行けない場合でも、大会に参加できる」「遠方の人や前後に用事がある人でも時間を調整しやすく、気軽にオンラインで参加できるので、現場に負担をかけるが、今後もハイフレックス方式による開催を検討いただきたい」「今年度は時間帯が重なる発表を複数視聴できた点が良かった。片方の配信をリアルタイム視聴し、もう片方の配信は一時停止しておき事後に視聴するという方法を取った」「対面のみより多数の会員が参加できる」「対面・オンラインを選べるほうがよい。オンラインは、使い方が簡便なので、Zoomがよいように思う」などがあった。

また、Zoom によるリアルタイム方式を希望する理由として「Zoom によるリアルタイム方式は使いやすい」などがあった。

さらに、オンデマンド方式がよい理由として「同時刻配信の発表を視聴できるから」などが

あった。

一方、いずれとも言えない理由として「ハイフレックスが参加する側としては選択肢があってよいと思う。一方、おととしのオンデマンドは、自由な時間に見られたことと、見たい発表が同時展開で見られないことが無かったのが良い点だった。ハイフレックスで録画したものを一定期間見られるようにするなどの方法がとれるとよいと思う」などがあった。

■大会全般について

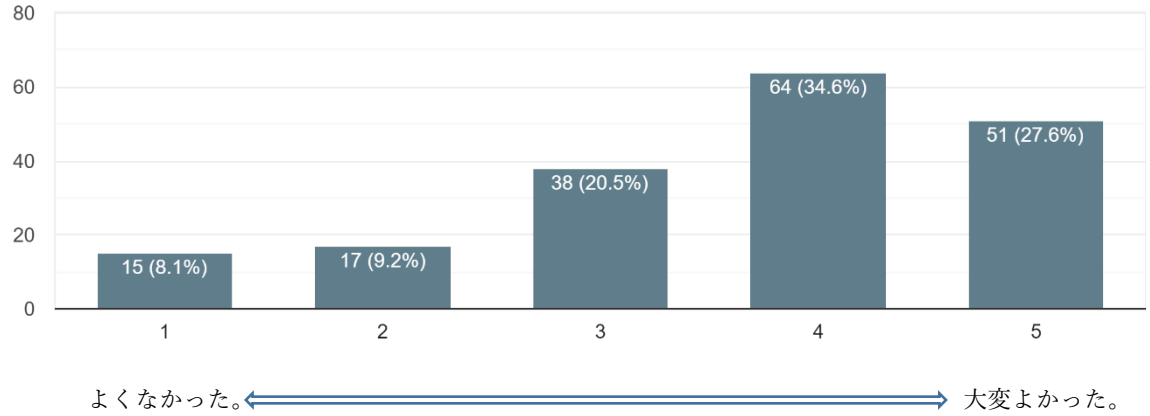
その他、第 74 回大会に関して、お気づきの点やご意見などがありましたら、自由にご記入ください。

「もし可能であれば、期間限定でしばらく録画がみられるともっと多くの発表をみることができるので、ありがたい」「早稲田大学の東亜貴重資料展の Net による公開はすばらしかった」「振込用紙の番号の誤りなど、数字や時間などに間違いがあると影響が大きいので、チェック体制を充実していただきたい」などの記述があった。

【Ｄ】回答者すべてからの回答（２）

■大会および日本中国学会全般について

今回の大会参加のしかた（対面参加・オンライン参加のいずれも期日までに大会参加費を振り込むとともに、フォームにより必要事項を入力する。その後、手続済の会員に対して、オンライン参加用のＵＲＬと発表資料のパスワードが送信される）は、いかがでしたか。



185 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）64 名（34.6%）、［５］（大変よかった）51 名（27.6%）、［３］（どちらともいえない）38 名（20.5%）と続いた。［４］［５］をあわせると、115 名（62.2%）と６割以上を占め、肯定的な回答が多かったといえる。

■大会参加に関する連絡について

▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

よかった点として「ハイブリット方式の運営は大変だったと思う。感謝します」「参加費を振り込みながら、フォームへの入力を忘れていたところ、連絡頂いて助かった」などの回答が多かった。

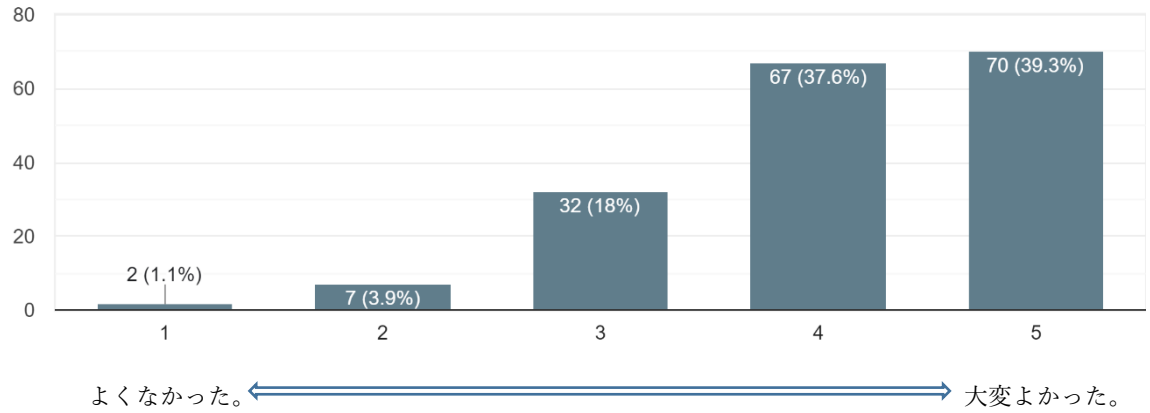
一方、改善の余地がある点として「大会要項や申込の方法などが送られてきたのが遅かったと思う」「案内到着から振込、申込期限が大変短く感じた。あと 1 週間猶予があると助かる」「参加費を郵便局から振り込むのであれば、2 週間前には連絡してくださると助かる」「オンライン参加の締め切りを少し延ばしていただきたい」「途中、連絡に把握しにくい点があって不安を感じた。あらかじめ段取りが示されれば、そうした問題を回避することができるのではないか」など、大会案内の到着が遅れたこと、参加申込までに期間が短かったことに関する意見が寄せられた。

また、「当日参加も認めてほしい」「直前に参加できるようになった場合に対応できない」など、当日参加に関する意見、さらに「参加費の支払方法の選択肢がもっとあればいいと思う」「クレジットカードでの支払いなどと連動させられるとよりよいかと思う」など、参加費の支払方法に関する意見があった。

その他、「大学から当日参加の証明を出すように言われ何もないことに気づいた」「発表資料を事前に読みたいので、もっと早くパスワードを教えていただきたい」「振込とフォームによる二重登録は安全だと思うが、フォームでの申込を忘れてしまう人があり、大会開催校には仕事が増えて負担が大きかったのではないか」「振込の口座番号が間違っていたため、振込ができずに苦労した。口座番号は重要なので、確認をして欲しかった」などの意見や要望があった。

■研究発表資料の公開方法について

研究発表資料の公開方法（参加予定者へのメールに大会特設サイトのパスワードを記載し、そこから各自でダウンロードしていただく）はいかがでしたか。



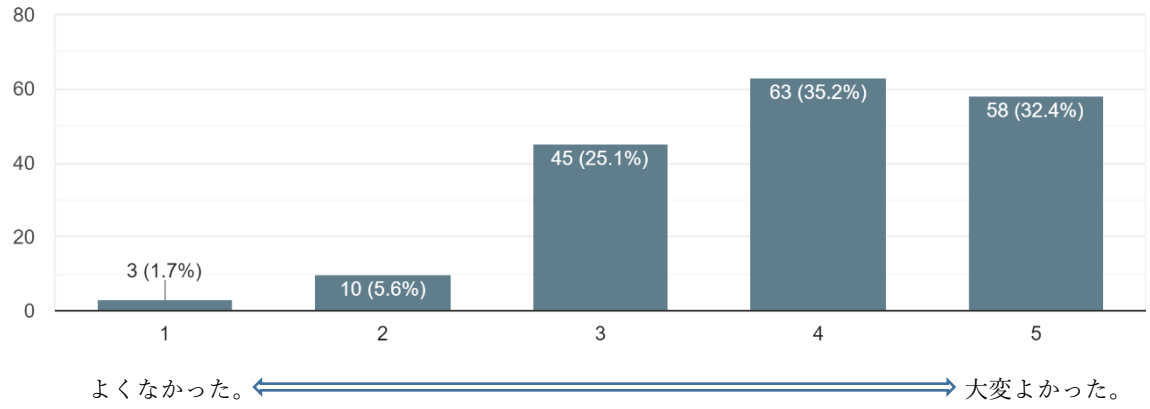
178 件の回答のうち、多い順に［５］（大変よかった）70 名（39.3%）、［４］（よかった）67 名（37.6%）、［３］（どちらともいえない）32 名（18.0%）と続いた。［４］［５］をあわせると 137 名（76.9%）で、多数から肯定的な回答が得られた。

▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

よかった点として「パスワード方式および期間限定の公開が非常によかった」という記述があったが、一方、改善の余地がある点として「発表資料をダウンロードするのに手間取ったため、シンポジウム単位や部会単位で一括ダウンロードできる方法があればと感じた」という意見があった。

■研究発表資料の公開期間について

研究発表資料の公開期間（10 月 6 日から 10 月 11 日まで）についてはいかがでしたか。



179 件の回答のうち、多い順に［４］（よかった）63 名（35.2%）、［５］（大変よかった）58 名（32.4%）、［３］（どちらともいえない）45 名（25.1%）と続いた。［４］［５］をあわせると 121 名（67.6%）で、おおむね肯定的な回答が得られた。

▼よかった点、改善の余地がある点（自由記述）

改善の余地がある点として「もう少し公開期間が長くでもよかった」「せめて大会終了一週間くらいまで長いほうがありがたい」という意見があった。

■次世代シンポジウムおよび書評シンポジウムの実施について

今回の第 74 回大会では、次世代シンポジウムに加えて、新たに書評シンポジウムが開催されました。次世代シンポジウムおよび書評シンポジウムの実施について、ご意見があれば自由にご記入ください。

シンポジウム全体については「意義のある取組であった」「今後もこのような企画を積極的に充実させていくのがよい」という回答が多かった。その一方で「他の発表と重なって拝見できなかった。他の発表と重なっても見られるようなシステムがほしい」「シンポジウムは大会とは別の日に開催する（オンラインだけでも良い）方が若手会員のためになるのではないか」「シンポジウムは、登壇者が各自の見解を述べて終わりになるように思われるので、登壇者同士の論戦が起こるような仕掛けがあると面白いと思う」「〈次世代〉とか〈書評〉」とかのしば

りをもうけずに、その都度、複数で何かやりたい会員がシンポジウム枠として申請するのも良いかもしれない」「若手の研究を支援しようとする意図は理解できるしすべきと思う。しかし老会員も研究を止めていないものも少なくない。老会員にとって発表しづらい雰囲気を感じる」などの意見が見られた。

また、今回は、とりわけ書評シンポジウムに対する反響が大きく、「大会に新しい風をもたらしたように思う」「若手の励みになる」「大変有意義な試みであったと思う」「新旧両世代の会員の交流を図ることができるシンポジウムで、研究発表とはまた異なる刺激を与えられる。博士論文を書籍として上梓した後の、いわゆる中堅世代の研究上の関心が、博士論文以降、どのように進展しているのかといった課題を共有することもできる。今後も継続していただきたい」など、肯定的な意見が多く寄せられた。

その中で「研究発表の時間を減らさずに、上手にプログラムを組んでほしい」「誰の著作が選ばれるかで成否が変わってくるため、いつでも出来る企画ではない」「選ばれた人と漏れた人との落差が大きく、かりに不公平感があると、将来の学会活動に影響することが危惧される」「当該著作を読んでいない人でも、何かしら議論に参加する余地があるような形があると、より活発な意見交換ができたかもしれない」「取り上げる書籍について決まった時点で早めに通知してもらえると、一層良かった」「著作を一つだけ複数の関係者が取り上げるのではなく、複数の著作についてそれぞれの評者が紹介を兼ねて書評を加える方が良いと思う」「書評対象書はそれなりの価値があるものが選ばれているが、その著者は壇上で苦労されていたはずである。フロアの発言も含め批評内容は厳しくあってかまわないが、対象書として選ばれ励みになって結果的によかったと著者が受けとめられるように、結果的に著者の励みになるようにシンポを作っていく旨をプログラムに書き添えておくとか、司会者が開始時にこの旨をフロアに呼びかけるとかとするとよいと思う。書評担当者、フロア及びオンライン発言者には、シンポジウムをよいものにし、著者にプラスになるようにするための責任があり、この旨を共有することが肝要である」など、改善を求める意見や今後に向けての提案があった。

■託児所の設置について

今回の第 74 回大会では、託児所が設置されました。託児所に関して、ご意見があれば、自由にご記入ください。

「大変有意義な試みであった」「今後も必ず設置して欲しい。子育て中の若手会員の参加が少し楽になる」「たとえ利用者が少なく赤字になっているのだとしても、継続していくことが大切である」のように肯定的な回答ばかりであった。その中で「託児所の利用は、まず会場まで子供連れで行くことが前提となるが、これには困難を伴うし、地域差も生じる。女性研究者に対する配慮や支援は、もっと現実的でありたい」という意見があった。

■日本中国学会全般について

日本中国学会全般について、ご意見やご提言などがありましたら、自由にご記入ください。

まず、学会全般に関して「年に１回のみの大会の他に、何か活動が必要と思われ、大会以外の学会の活動についてアンケートを取ったほうが、学会全体の活動がさらに充実するかもしれない」「対象は中国だが、果たして日本人のための学会なのか、年を追うごとに戸惑いを覚える」「ひとりひとりの会員の研究活動あってこその学会であることを大切にする学会組織を望む」「当然入っていて欲しい研究者が入っていないことに気づくと悲しい。他の学会との人材交流をしてみてもいいのではないか」などの意見や提案があった。

また、歴史部門に関して「歴史部門については、継続的に設置できるかどうか検討の余地がある」「歴史部会について、はじめてということで、時代・発表者がかなり偏っているように感じた」などの意見があった。

さらに、学会報や大会に関して「もし学会報がデジタルで見られるのであれば、冊子で配布する従来のやりかたを見直して、必要な人だけに送付されるのでもいいかと思う」「発表者に大学院生、若手が多くて、中堅どころの研究の成果が期待できる研究者の発表が少なく、刺激がない。学会のレベル低下を懸念する」「シニアフォーラムのようなものがあれば面白いかもしれない」「開催方法の多様化等、開催校への負担は今まで以上に大きくなることが予想される。学会として、大会は重要な活動の一つであることは変わらないので、開催校のみならず、会員皆で協力して発展させていくことが益々必要だと感じた」「中国学専任教員が３～５名ほどでも大会が開けるように、一部外注や大会委員会委員の開催校へのスタッフ補助出張などの工夫が、これからは肝要かと思う」「来年度はぜひ懇親会を復活してほしい」などの意見や提案が寄せられた。